

昭和63年度日帰り人間ドックの成績

厚生連総合検診センター

小川 忠邦, 中谷 恒夫, 川口 京子,
松井 規子, 岸 宏栄, 永田 隆恵,
保井 陽子, 砂田 誠一郎, 谷川 秀明,
荻野 孝次

厚生連総合検診センターにおける昭和63年度の日帰り人間ドックの受診者は5403人と前年度よりさらに増加し、フル稼働の状態であった。処理能力を越えた一日25人以上の日がかなりあったため、結果報告や事後指導などに支障を来し、受診者に迷惑をかけたことが少なからずあったことをお詫びしたい。

健康に対する関心が高まるにつれて受診者のニーズも高くなり、検診の質・量共に充実させていかなければならないのは当然であろう。さらに今後は、二次検診体制、精度管理、事後指導、他の検診機関や行政機関との密接な連携など、検診というものを総合的な視野からとらえる体制が必要になってくると思われる。

今回は新たに胆のうの超音波検診をとり入れ全員に実施した。云うまでもなく、肝癌、胆のう癌、膵癌並びに腎癌の増加は著しく、それらの早期発見の手段として超音波検査が最も適していることはすでに異論がなく、集団検診の場にかなり登場してきている。しかし技術的な問題が検診の精度を大きく左右することから、広く普及するにはなお時間がかかると思われる。当センターにおいては、放射線技師による約半年間のトレーニングの後実施にふみきったが、技術的、時間的制約の関係で対象を胆のうのみにしぼった。しかし今後は肝、膵、腎にも対象を拡げていくこと

は当然であろう。その成績は後述する。

以下に63年度の検診成績を、前年度までと同じ方式に従って、前年度と比較しながら臓器別に検討して報告する。

(1) 受診状況

表1に年代別、性別受診状況を示す。総数は5403名で、前年度より269名、5.0%増加した。男女別では男性46.5%、女性53.5%と前年度とほぼ同じ割合であり、年代別では50才台が最も多く、40~69才が全体の85.7%を占めて前年度よりやや多くなったが、39才以下の若年者がやや減少した。また50才台では女性が男性の1.7倍であるのに対して、39才以下と70才以上では逆に男性が女性の1.5倍とやはり前年度と同じ傾向であった。利用回数別では表2に示すように、初回受診者が31.4%

表1 年代別・性別受診状況

年代 \ 性別	男	女	計 (%)
~29才	35	14	49 (0.9)
30~39才	294	266	560 (10.4)
40~49才	649	736	1385 (25.6)
50~59才	747	1236	1983 (36.7)
60~69才	659	607	1266 (23.4)
70才~	128	32	160 (3.0)
計 (%)	2512 (46.5)	2891 (53.5)	5403 (100.0)

表2 利用回数別受診状況

回数	数	人数	(%)
1回		1,696	(31.4)
2回		1,122	(20.8)
3回		814	(15.1)
4回		634	(11.7)
5回		433	(8.0)
6回		277	(5.1)
7回		200	(3.7)
8回		133	(2.5)
9回		89	(1.6)
10回		23	(0.4)

と年々減少して、再受診者あるいは継続受診者が増加してきている。農協別では入善町農協が1572名と全体の29.1%を占め、ついで福光中央、黒部、富山市、連合会、滑川市、富山市中央の各農協順に多かった。

(2) 総合判定

年代別、性別の総合判定結果は表3の通りである。異常なし、差支えなしは20.3%と前回と全く同じであったが、男性20.7%、女性

20.0%と、前回男性がやや多かったのに比べて、今回は男女差が殆んどみられなかった。他の判定区分も前回とほぼ同様な傾向であった。なお高令者ほど異常が多かったのは当然である。

(3) 呼吸器

表4に示す通り、男性11.9%、女性5.8%、平均8.6%に異常所見がみられ、男女共前回より増加した。これは胸部X線写真の読影に際して特に肺癌を意識した関係上、再検や経過観察が増加したためである。ここで胸部X線写真の所見及び指示内容を具体的に述べると、とりあげた所見は肺異常陰影（主に肺野の孤立性限局性陰影を呈するもの）166人（男96、女70）、肺門影増大（いわゆる肺門部陰影の腫脹がみられるもの）139人（男86、女53）並びに肺紋理増強（肺血管陰影などの増強、太まりがみられるもの）68人（男50、女18）で、計372人（男230、女142）であった。その比率は男性9.2%、女性4.9%、平均6.9%となり、

表3 年代別・性別 総合判定分類

判定	年代性別		～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合計		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男 (%)	女 (%)	計 (%)
異常なし	8	1	59	48	105	100	72	164	48	47	8	1	300 (11.9)	361 (12.5)	661 (12.2)		
差支えなし	8	2	36	38	61	59	55	71	58	45	4	1	222 (8.8)	216 (7.5)	438 (8.1)		
要再検			1	11	3	21	18	26	38	21	13	1	80 (3.2)	73 (2.5)	153 (2.8)		
要経過観察	12	5	96	107	229	295	248	453	195	201	40	11	820 (32.6)	1,072 (37.1)	1,892 (35.0)		
要精密	6	4	73	52	166	169	216	304	183	161	38	7	682 (27.1)	697 (24.1)	1,379 (25.5)		
要治療	1	1	5	10	17	51	30	39	16	16		1	69 (2.7)	118 (4.1)	187 (3.5)		
治療中			14	8	50	44	100	167	138	124	37	11	339 (13.5)	354 (12.2)	693 (12.8)		
合計	35	14	294	266	649	736	747	1,236	659	607	128	32	2,512	2,891	5,403		

表4 呼吸器

判定	年代性別		～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合計		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男 (%)	女 (%)	計 (%)
異常なし	33	14	275	258	602	711	639	1,145	557	562	105	30	2,211	2,720	4,931 (91.3)		
差支えなし							1	1	2	1			3	2	5 (0.1)		
要再検			3	3	11	4	31	25	27	15	3		75	47	122 (2.3)		
要経過観察	2		11	3	26	12	51	46	50	20	16	1	156	82	238 (4.4)		
要精密			3	1	8	7	20	16	17	6	3	1	51	31	82 (1.5)		
要治療													0	0	0 (0.0)		
治療中			2	1	2	2	5	3	6	3	1		16	9	25 (0.5)		

男性は女性の2倍であったが、喫煙の有無とは無関係であった。これら所見に対する指示区分は、①要精査としたもの79人で、そのうち特に癌が強く疑われたものは6人であったが、精検の結果、異常なし2人、陳旧性の肺炎ないし肺結核2人、肺の結節性陰影あるも確診に至らず経過観察となったもの1人、癌が否定できず手術され結核腫と判明したものの1人で、結局癌は発見されなかった。②再検としたもの123人で、このうち再検の結果によっては癌がかなり疑われるものは14人であったが、その殆んどは異常なしないし陳旧性の陰影で、癌は発見されなかった。③経過観察としたもの170人で、その殆んどは問題ないと思われるものであり、このうち107人は前回との比較読影において不変であった。

一方喀痰細胞診は前年度と同じ方法⁴⁾で実施し、519名中回収された検体は390名(男369名、女21名)で、回収率は75.1%であった。その成績は表5に示す通りで、D判定(要精密)はなく、C判定(要再検)が3名あったが、いずれも再検の結果異常はみられなかった。

以上今回は、胸部X線写真の読影において

表5 喀痰細胞診

判定	性別		計
	男	女	
材料不滴 (A)	1	0	1
異常なし (B)	365	21	386
要再検 (C)	3	0	3
要精密 (D)	0	0	0

表6 循環器

判定	年代性別		～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合計		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	計	(%)	
異常なし	32	13	251	247	482	607	459	799	348	318	52	11	1,624	1,995	3,619	(67.0)	
差支えなし	1	1	24	3	52	14	65	28	70	31	15	3	227	80	307	(5.7)	
要再検			1	2	13	9	18	30	12	10	2		46	51	97	(1.8)	
要経過観察	2		15	10	70	77	115	242	118	134	26	9	346	472	818	(15.1)	
要精密			1	1	5	3	14	17	10	12	3		33	33	66	(1.2)	
要治療				1	2	1	5	1	3	2		1	10	6	16	(0.3)	
治療中			2	2	25	25	71	119	98	100	30	8	226	254	480	(8.9)	

ダブルチェックを行ない、かなり過剰読影を行なって癌の早期発見に努力したつもりであるが、全例に確認されてはいないものの、癌は発見されなかった。その他では気管支喘息、肺気腫、陳旧性肺結核や胸膜炎、塵肺症などが若干みられたのみであった。

(4) 循環器

表6に示す通り、異常なし、差支えなしを除く異常所見者は27.3%で、男女差は殆んどなく前年度とほぼ同じであった。

内訳をみると、先ず高血圧(疑も含む)は表7の通り17.5%にみられ、男女差はなく、このうち一過性の高血圧と思われる要再検者を除くと15.4%となり、前年度とほぼ同じ傾向であった。これを年代別にみると、39才以下2.1%(男女共2.1%)、40才台9.3%(男11.3%、女7.6%)、50才台18.7%(男18.9%、女18.5%)、60才台22.0%(男21.4%、女22.6%)、70才以上25.6%(男24.2%、女31.3%)となり、高令者ほど高血圧の頻度が高くなり、また高令になるほど女性に高血圧が多くなる傾向がみられている。高血圧者の半数がすでに治療中であり、高令者ほど治療中の者が多くなっている。一方放置してある者でも軽症高血圧(最小血圧95～104mmHg)が大半であるが、治療を中断している者もかなりみられた。高血圧以外の循環器疾患は表8に示す通りである。高血圧と関連の深い心肥大、心負荷は男11.8%、女6.8%、平均9.1%にみられ、前年度とあまり変らなかつたが、男性にはる

かに多くみられている。しかしこれは主として心電図上の所見であって偽陽性もかなり含まれていると考えられるが、男性に多い理由として肥満、飲酒などの影響もあるかもしれない。虚血性心疾患は男2.9%、女8.5%、平均5.9%にみられ、前年度よりやや減少した。これもやはり心電図上の所見であって偽陽性がかかり含まれていると考えられるが、女性に多い理由として、貧血や高コレステロール血症なども関与しているかもしれない。その他比較的よくみられるものとして、期外収縮

1.9%、右脚ブロック1.9%などがあり、ついで心室内伝導障害、心房細動なども少なからずみられているが、前回と同様な傾向であった。

(5) 上部消化管

5318名、98.4%が胃透視をうけ、その結果を表9に示す。異常なし、差支えなしを除く異常所見者は男32.0%、女19.8%、平均25.5%で、前年度と殆んど同じであった。これを部位別にみると、食道0.25%、胃20.7%、十

表7 高血圧

年代性別 判定	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	計 (%)
差支えなし													0	0	0 (0.0)
要再検査			1	2	16	10	19	35	12	17	3		51	64	115 (12.2)
要経過観察			5	3	47	33	73	123	61	45	10	4	196	208	404 (42.7)
要精密検査													0	0	0 (0.0)
要治療				1	2	1	4	1	3			1	9	4	13 (1.4)
治療中			2	2	24	22	64	105	77	92	21	5	188	226	414 (43.8)
合計 (%)	0 (0.0)	0 (0.0)	8 (2.7)	8 (3.0)	89 (13.7)	66 (9.0)	160 (21.4)	264 (21.4)	153 (23.2)	154 (25.4)	34 (26.6)	10 (31.3)	444 (17.7)	502 (17.4)	946 (17.5)

表8 高血圧以外の循環器異常

内訳 判定	心肥大 心負荷		虚血性心疾患		期外収縮		右脚ブロック		その他	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
差支えなし	92	16			48	27	56	23	64	25
要再検査			1			1				
要経過観察	186	176	51	210	14	8	18	4	58	37
要精密検査	16	4	4	15	1	1			11	8
要治療				2					1	
治療中	3		16	18	5		1		24	23
合計 (%)	297 (11.8)	196 (6.8)	72 (2.9)	245 (8.5)	68 (2.7)	37 (1.3)	75 (3.0)	27 (0.9)	158 (6.3)	93 (3.2)

表9 上部消化管

年代性別 判定	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	計 (%)
異常なし	19	2	225	232	470	624	471	963	387	422	78	25	1,650	2,268	3,918 (73.7)
差支えなし					2	2	11	9	7	9	6		26	20	46 (0.9)
要再検査													0	0	0 (0.0)
要経過観察	1		12	8	63	28	98	88	91	60	18	1	283	185	468 (8.8)
要精密検査		2	43	17	102	73	147	159	148	107	22	6	462	364	826 (15.5)
要治療			2		2	1	3	1	5				12	2	14 (0.3)
治療中			4	2	5	2	9	7	13	3	1		32	14	46 (0.9)

二指腸2.4%となる。胃炎やポリープの所見があり過去に胃カメラで確認されている場合は主として要経過観察とし、潰瘍所見の明らかな者は要治療とし、その他の有所見者の大部分を要精査とした。その結果、要精査、要治療者は15.8%となり、精査受診者は74.9%(男68.8%, 女82.8%)と前年度よりやや低下した。その結果を表10に示す。発見胃癌は男9名、女6名計15名で、総受診者に対する比率は0.28%であった。そのうち早期癌は7名、進行癌4名、不明4名である。

胃癌のほかは、胃潰瘍(瘢痕)49名(0.9%)十二指腸潰瘍(瘢痕)22名(0.4%)、胃ポリープ64名(1.2%)、胃粘膜下腫瘍6名(0.1%)などがみられた。

云うまでもなく、より早期の胃癌発見や胃透視の弱点を補うために内視鏡の果たす役割は大きい。従って今後は精査を目的とするだけでなく、一次検診の手段として内視鏡を検診の場に積極的にとり入れていく必要があると考えられる。

(6) 糞便潜血反応

受検者は4752名、88%で、前回よりやや増加した。今回から免疫法(モノヘム法)に変更し、当日持参の3日間の便について実施した。3回のうち1回でも陽性を示した者は、男2.1%、女1.4%、平均1.8%で、予想通り陽性率は激減した。今回はその中から大腸癌は発見されなかったようである。

増加の著しい大腸癌のスクリーニングの手段として便潜血反応の適否については、多少論議のあるところではあるが、その簡便さの故広く普及しつつあり、特に免疫法が開発されてから偽陽性が著減したため、検診効率が⁵⁾高まり見直されてきている。しかしその精度の弱点を補う目的で、高危険群を対象とした内視鏡検診の導入などを考慮する必要があると思われる。

(7) 肝 臓

肝機能の成績は表11に示すように、男22.7%、女8.7%に異常がみられ、ほぼ前年度と同

表10 上部消化管精査結果

年代性別	内訳 受診者数	胃要精 査者数	精 査 者 数	精 査 率 (%)	精 査 結 果 内 訳													
					胃 癌	A T P	胃 粘 膜 下 腫 瘍	胃 潰 瘍	胃 潰 瘍 瘢 痕	胃 ポ リ ー プ	12指腸 潰 瘍	12指腸 潰 瘍 瘢 痕	12指腸 ポ リ ー プ	胃 炎	その他	異 常 な 常 規		
29歳以下	男	20																
	女	4	2	1	50.0												1	
30 ~ 39	男	286	45	33	73.3				2	1	2	4				17	2	5
	女	259	17	16	94.1											6	1	9
40 ~ 49	男	644	104	71	68.3	1	1		6	2	4	2				38	2	15
	女	730	74	59	79.7	1		2	2		8	2			2	22		20
50 ~ 59	男	739	150	93	62.0	1	1	1	7	5	6	5	1			41	5	20
	女	1,227	160	132	82.5				5	2	17	3	1			59	7	38
60 ~ 69	男	651	153	112	73.2	7	1	3	9	3	13	1	1			56	6	12
	女	601	107	90	84.1	4				2	12		1	1	1	40	5	25
70歳以上	男	125	22	17	77.3				2		1	1				8	1	4
	女	32	6	5	83.3	1			1		1					2		
計	男	2,465	474	326	68.8	9	3	4	26	11	26	13	2			160	16	56
	女	2,853	366	303	82.8	6		2	8	4	38	5	2	3		129	13	93
総計		5,318	840	629	74.9	15	3	6	34	15	64	18	4	3		289	29	149

表11 肝 臓

判定	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	計 (%)
異常なし	30	13	229	253	468	697	554	1101	541	537	117	28	1,939	2,629	4,568 (84.5)
差支えなし				1				7	2	2			2	10	12 (0.2)
要再検査			6	2	10	6	9	36	10	15	2	2	37	61	98 (1.8)
要経過観察	5	1	44	9	144	16	152	69	86	33	5	1	436	129	565 (10.5)
要精密検査			9	1	15	11	15	14	8	11	2		49	37	86 (1.6)
要治療			1	3	3	3	5	3	2	2			12	5	17 (0.3)
治療中			5	9	3	3	12	9	9	7	2	1	37	20	57 (1.1)

表12 肝臓の異常

判定	内訳		アルコール性肝障害		その他の肝障害		HBs抗原性陽性	
	男	女	男	女	男	女	男	女
差支えなし				2	10			
要再検査			35	59		2	3	
要経過観察	318		91	105	27	24		
要精密検査			27	19	21	17		
要治療	4		6	5	2			
治療中	2		31	20	3			
合計 (%)	324 (12.9)	0 (0.0)	192 (7.6)	218 (7.5)	55 (2.2)	44 (1.5)		

じてあった。その内訳は表12に示す通りである。アルコール性肝障害と思われるものは全員男性で、男性の12.9%にみられた。その他の肝障害は7.6%にみられ男女差はなく、HB抗原陽性者は1.8%で前年度よりやや減少した。HB抗原陽者に対して行なっているAFP測定では全員陰性であった。

(8) 膵 臓

膵疾患発見の目的で尿アマラーゼ測定を行なっているが、一回尿について酵素法で測定し、2300単位以上を異常値とした。その結果男1.5%、女0.8%平均1.2%に異常を認め、前年度よりやや増加した。しかしこの中から膵疾患は発見されなかったようである。アマラーゼ値を膵癌発見の指標とすることは、感度及び特異度の点で不十分ではあるが、アマラーゼ値の上昇が膵癌発見のきっかけになることは、日常臨床でもしばしば経験されることであり、スクリーニングとしての価値よりも一例でも拾いあげることができればという考

表13 胆のうの異常

判定	内訳		胆のう腫瘍		胆 石		胆のうポリープ		胆のう炎	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
差支えなし										
要再検査										
要経過観察					2	3	2	1	11	6
要精密検査	9	6	111	128	56	55				
要治療										
治療中			2	2						1
合計 (%)	9 (0.4)	6 (0.2)	115 (4.6)	133 (4.7)	58 (2.3)	56 (2.0)	11 (0.4)	7 (0.2)		

え方で、今後も続けていきたい。

(9) 胆 の う

今回から超音波エコーによる胆のうの検査を実施し、表13に示すような結果を得た。即ち男7.7%、女7.0%、平均7.4%に異常がみられ、内訳は、胆石(疑)が男4.6%、女4.7%、平均4.6%、胆のうポリープ(疑)が男2.3%、女2.0%、平均2.1%、胆のう腫瘍疑が0.3%などであった。全員を要精査とし、精査の結果と比べて高い一致率がみられた。この中から胆のう癌は発見されなかったが、胃の精査過程においてすでに腹膜まで浸潤した進行胆のう癌が偶然発見された一例を経験し、これは一次検診の段階で見落されていた例で、技術的な問題が浮かび上がった。なお超音波検診による胆石及び胆のうポリープの発見率は諸家の報告と大差なく、殆んどが無自覚であった。

(10) 腎・泌尿器

表14に示す通り、異常なし、差支えなしを

表14 腎・泌尿器

判定	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	計 (%)
異常なし	34	12	285	231	625	652	700	1,088	604	518	120	25	2,368	2,526	4,894 (90.6)
差支えなし		2	2	23	3	47	4	52	5	39	1	1	15	164	179 (3.3)
要再検	1		1	1	2	1	6	6	7	1	1		18	9	27 (0.5)
要経過観察			3	11	15	29	31	82	35	48	5	4	89	174	263 (4.9)
要精密			2		2	2	4	4	4			1	12	7	19 (0.4)
要治療						1							0	1	1 (0.0)
治療中			1		2	4	2	4	4	1	1	1	10	10	20 (0.4)

表15 腎・泌尿器異常

判定	内 訳		蛋 白 尿		血 尿		そ の 他	
	男	女	男	女	男	女	男	女
差支えなし	2		11	165				
要再検		6	12	3	6	2		
要経過観察	38	9	50	118	2	48		
要精密	1	2	8	4	1	2		
要治療								1
治療中	1	1	3		6	9		
合 計 (%)	42 (1.7)	18 (0.6)	84 (3.3)	290 (10.0)	15 (0.6)	62 (2.1)		

除く異常所見者は男5.1%,女7.0%,平均6.1%で,前年度とほぼ同じであった。その内訳は表15の通り,女性の血尿が最も多く,女性の10.0%を占め,男性にも3.3%にみられたが,その殆んどは病的意義の少ないものと考えられる。蛋白尿は男1.7%,女0.6%にみられ,その他尿路感染(疑),腎結石などが若干みられた。いずれも前年度と比べて大きな差はみられなかった。

腎癌,膀胱癌,前立腺癌など泌尿器系の癌は増加しており,早期発見の手だては重要で

表16 血液

判定	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	計 (%)
異常なし	34	11	254	220	559	594	663	1,132	586	549	115	25	2,211	2,531	4,742 (87.8)
差支えなし	1	1	31	5	78	18	66	33	53	16	4		233	73	306 (5.7)
要再検			6		5	2	3	4	2	1	2		18	7	25 (0.5)
要経過観察		2	3	37	7	98	12	59	15	38	7	7	44	241	285 (5.3)
要精密							1			1			1	1	2 (0.0)
要治療					2		20	2	7	2			4	29	33 (0.6)
治療中					2		4		1	2			1	9	10 (0.2)

あるが,血尿などの異常者を全員精査とするには偽陽性が多すぎて問題があり,また特異性にも乏しいと云われている。今後超音波エコー,尿細胞診などがスクリーニング法として考えられるであろう。

(11) 血 液

表16に示す通り,男2.7%,女9.9%,平均6.6%に異常がみられた。その大部分は女性の貧血(Hb 12.0g/dl以下)で,女性の9.6%にみられており,前年度と殆んど同じであった。これは49才以下16.1%,50才以上6.1%となり,比較的若年者に圧倒的に多くみられている。その他では,男性に白血球増加が比較的多くみられた。

(12) 内分泌(甲状腺)

甲状腺腫大のみられたものは,軽度のものを含めると男2.0%,女11.1%であり,その殆んどは単純性のびまん性甲状腺腫と思われる。しかし要精査とした中から甲状腺癌が3名(いずれも女性)発見された。

表17 糖・代謝

判定	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	計 (%)
異常なし	33	14	263	256	550	696	624	1,124	555	536	108	29	2,133	2,655	4,788 (88.6)
差支えなし				4	1	6	4	13	5	2	1		11	25	36 (0.7)
要 再 検			4	2	16	10	27	28	22	29	2	1	71	70	141 (2.6)
要経過観察	1		23	4	55	19	36	29	39	18	8	1	162	71	233 (4.3)
要 精 密			2		14	3	29	19	14	9	1		60	31	91 (1.7)
要 治 療	1		2		9	1	14	5	3	2			29	8	37 (0.7)
治 療 中					4	1	13	18	21	11	8	1	46	31	77 (1.4)

表18 糖・代謝異常

判定	内 訳		糖 尿 病		高尿酸血症		高γグロブリン血症	
	男	女	男	女	男	女	男	女
差支えなし	2	1					9	26
要 再 検	79	68						
要経過観察	45	25	116	1	11	46		
要 精 密	59	30			1	1		
要 治 療	22	8	7					
治 療 中	40	30	5		1	1		
合 計	247	162	128	1	22	74		
(%)	(9.8)	(5.6)	(5.1)	(0.0)	(0.9)	(2.6)		

(13) 糖 ・ 代 謝

異常なし、差支えなしを除く異常所見者は表17に示す通り、男14.6%、女7.3%、平均10.7%にみられ、前年度よりやや増加した。その内訳は表18に示す通りである。糖尿病（疑）（空腹時血糖 110mg/dl 以上）は男9.8%、女5.6%、平均7.7%で、前年度よりかなり増加した。特に男性において増加が目立っている。一方高尿酸血症は殆んど男性で、男性の5.1%にみられ、これは前年度より減少した。

空腹時血糖上昇者の増加が、直ちに糖尿病

の増加に結びつかないかもしれないが、何らかの糖代謝異常の反映とも考えられ、今後注意すべき点であろう。

(14) 血 清 脂 質

表19に示す通り、総コレステロール、中性脂肪、HDLコレステロールいずれかが異常を示した者は男24.8%、女22.6%、平均23.6%で、前年度よりかなり減少した。特に女性での減少が目立ち、前年度とは男女が逆転した。これを年代別にみると、若年（49才以下）では男性に、高令（50才以上）では女性に異常が多くみられ、前年度と同じ傾向であった。これを各脂質別にみると、コレステロールのみ高値は表20のように、男2.0%、女8.2%、平均5.3%で、圧倒的に女性に多かった。特に50才以上の女性で著しく多くなっている。中性脂肪のみ高値は表21に示すように、男16.2%、女5.9%、平均10.7%で、男性に圧倒的に多くみられた。特に49才以下の若年男性に目立っている。両者共高値は表22のように、男2.1%、女2.0%と男女差はなく、結局高コレ

表19 血清脂質

判定	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	計 (%)
異常なし	27	14	207	240	453	631	572	907	531	425	100	21	1,890	2,238	4,128 (76.4)
差支えなし									1		1		2	0	2 (0.0)
要 再 検							1						1	0	1 (0.0)
要経過観察	8		86	25	193	103	170	316	125	169	26	11	608	624	1,232 (22.8)
要 精 密													0	0	0 (0.0)
要 治 療			1	1	2	1	2	2	1	4			6	8	14 (0.3)
治 療 中					1	1	2	11	1	9	1		5	21	26 (0.5)

表20 高コレステロール血症単独

年代性別 判定	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	計 (%)
差支えなし													0	0	0 (0.0)
要再検査													0	0	0 (0.0)
要経過観察			7	2	12	23	15	113	11	75	3	4	48	217	265 (4.9)
要精密													0	0	0 (0.0)
要治療				1		1	1	2		3			1	7	8 (0.1)
治療中						1		5	1	6	1		2	12	14 (0.3)
合計 (%)	0 (0.0)	0 (0.0)	7 (2.4)	3 (1.1)	12 (1.8)	25 (3.4)	16 (2.1)	120 (9.7)	12 (1.8)	84 (13.8)	4 (3.1)	4 (12.5)	51 (2.0)	236 (8.2)	287 (5.3)

表21 高中性脂肪血症単独

年代性別 判定	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	計 (%)
差支えなし							1		1				2	0	2 (0.0)
要再検査													0	0	0 (0.0)
要経過観察	7	0	59	6	136	30	109	87	77	42	15	2	403	167	570 (10.5)
要精密													0	0	0 (0.0)
要治療			1										1	0	1 (0.0)
治療中					1		1	4		1			2	5	7 (0.1)
合計 (%)	7 (20.0)	0 (0.0)	60 (20.4)	6 (2.3)	137 (21.1)	30 (4.1)	111 (14.9)	91 (7.4)	78 (11.8)	43 (7.1)	15 (11.7)	2 (6.3)	408 (16.2)	172 (5.9)	580 (10.7)

表22 高コレステロール血症+高中性脂肪血症

年代性別 判定	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	計 (%)
差支えなし													0	0	0 (0.0)
要再検査													0	0	0 (0.0)
要経過観察			7	1	20	5	11	35	8	10	1	1	47	52	99 (1.8)
要精密													0	0	0 (0.0)
要治療					2		1	1	1	1			4	2	6 (0.1)
治療中							1	2		2			1	4	5 (0.1)
合計 (%)	0 (0.0)	0 (0.0)	7 (2.4)	1 (0.4)	22 (3.4)	5 (0.7)	13 (1.7)	38 (3.1)	9 (1.4)	13 (2.1)	1 (0.8)	1 (3.1)	52 (2.1)	58 (2.0)	110 (2.0)

表23 低HDLコレステロール血症

年代性別 判定	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	計 (%)
差支えなし											1		1	0	1 (0.0)
要再検査													0	0	0 (0.0)
要経過観察	2		25	19	58	64	56	125	44	75	12	5	197	288	485 (9.0)
要精密													0	0	0 (0.0)
要治療													0	0	0 (0.0)
治療中													0	0	0 (0.0)
合計 (%)	2 (5.7)	0 (0.0)	25 (8.5)	19 (7.1)	58 (8.9)	64 (8.7)	56 (7.5)	125 (10.1)	44 (6.7)	75 (12.4)	13 (10.2)	5 (15.6)	198 (7.9)	288 (10.0)	486 (9.0)

ステロール血症は男4.1%,女10.2%,平均7.4%,高中性脂肪血症は男18.2%,女8.0%,平均12.7%にみられた。一方低HDLコレステロール血症は表23に示すように,男7.9%,女10.0%,平均9.0%にみられた。

以上の脂質異常を前年度と比べてみると,全体としてかなり減少し,中でも高コレステロールの減少が男女共目立ち,特に女性において著しかった。これに対応して女性での低HDLコレステロールの減少が著明であった。これに反して男性の高中性脂肪血症は,殆んど改善がみられなかった。

(15) 肥 満

表24 肥満度

判定	年代性別		～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	計	(%)	
異常なし	21	13	173	201	389	561	456	880	420	389	74	16	1,533	2,060	3,593	(66.5)	
差支えなし	12		67	52	146	133	192	234	155	140	38	11	610	570	1,180	(21.8)	
要再検査													0	0	0	(0.0)	
要経過観察	2	1	47	6	104	33	81	100	72	62	10	3	316	205	521	(9.6)	
要精密検査			6	7	10	9	14	19	11	15	6	2	47	52	99	(1.8)	
要治療			1				4	3	1	1			6	4	10	(0.2)	
治療中													0	0	0	(0.0)	

表24に示すように,標準体重比(松木式)+10%以上の肥満者は男39.0%,女28.7%,平均33.5%で,前年度よりやゝ増加した。特に男性の肥満者の増加が目立っている。これを年代別にみると,男性ではほとどの年代にも平均してみられるのに対し,女性では高令になるほど肥満者が多くなっているのは前年度と同じ傾向である。

(16) 眼 底

表25に示すようにほとんどの前年度と同じく,男11.3%,女9.1%,平均10.1%に異常を認めた。主なものとしては高血圧性変化,網脈絡膜白斑・萎縮,乳頭陥凹などである。

表25 眼 底

判定	年代性別		～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	計	(%)	
異常なし	32	12	273	247	560	655	567	995	456	409	69	15	1,957	2,333	4,290	(82.7)	
差支えなし	1		7	5	31	24	68	84	82	60	6	6	195	179	374	(7.2)	
要再検査	1	1	5	2	16	15	24	38	26	22	6	6	78	78	156	(3.0)	
要経過観察		1	7	9	31	24	55	64	54	47	12	3	159	148	307	(5.9)	
要精密検査	1		2		5	8	11	4	6	6	3		28	18	46	(0.9)	
要治療							1	1	1	1			2	1	3	(0.1)	
治療中							1	3	3	3	2		6	6	12	(0.2)	

表26 乳 腺

判定	年代	～29才	30～39才	40～49才	50～59才	60～69才	70才～	計 (%)	
	異常なし		8	215	538	1,107	563	31	2,462
差支えなし					1			1	(0.0)
要再検査			1	9	9	1		20	(0.7)
要経過観察		3	44	147	88	33		315	(10.9)
要精密検査			6	40	31	10	1	88	(3.0)
要治療								0	(0.0)
治療中				1				1	(0.0)

表27 婦人科

判定	年代	～29才	30～39才	40～49才	50～59才	60～69才	70才～	計 (%)
異常なし		6	219	594	1,140	570	30	2,559 (90.8)
差支えなし				1				1 (0.0)
要再検査								0 (0.0)
要経過観察			15	75	44	16	1	151 (5.4)
要精密検査			5	8	12	8		33 (1.2)
要治療		1	7	27	28	11		74 (2.6)
治療中								0 (0.0)

表28 婦人科異常

判定	内訳	子宮筋腫	膣炎	子宮細胞診Ⅲ以上	その他
差支えなし		1			
要再検査					
要経過観察		103	2		51
要精密検査		9	3	6	16
要治療		5	50		20
治療中					
合計		118	55	6	87
(%)		(4.2)	(2.0)	(0.2)	(3.1)

(17) 乳 腺

外科医による触診と超音波断層撮影との併用で実施した。その結果を表26に示す。14.7%に異常を認め、前年度よりさらに減少した。これは継続受診者が多いため判定が考慮されたためである。要精査となった中から乳癌が一名発見された。

(18) 婦 人 科

2818名(97.5%)が受検し、その結果を表27に示す。9.2%に異常を認め、その内訳は表28の通りである。子宮筋腫、膣炎などが主なもので、前年度と大差はみられなかった。細胞診クラスⅢ以上は6名(0.2%)で、その中からO期の子宮癌が1名発見された。

(19) そ の 他

CRP反応陽性、皮膚病、頸部リンパ節腫大などが若干みられた。

ま と め

厚生連総合検診センターにおける63年度の日帰り人間ドック受診者5403名についての成績を、前年度までと同じ検討方式で分析し、その概略を報告した。云うまでもなくこれは一次検診での成績であり、発見された癌については各医療機関からの報告にもとづいて可能な範囲内で記載した。年々受診者が増加するにつれて、その物理的な能力の限界はともかくとして、内容の充実や精度管理が問題となってくる。特に精検受診率のアップを含め

た事後管理の充実や、二次検診結果の把握は重要で、今後真剣にとりくむ必要があると考えられる。

- (1) 癌は胃癌15名、甲状腺癌3名、乳癌1名、子宮癌1名計20名発見された。その殆んどが自覚症状のない早期の癌であった。
- (2) 胃癌は今回も15名、0.28%と高い比率で発見され、毎年コンスタントの成績が得られているのは評価できると思われる。その殆んどが治癒可能であることも検診の意義を物語っている。しかし精検受診率が75%と前年度より低下したことは気になる点である。事後管理のあり方や内視鏡検診の導入などを含めて、胃癌検診の方式を再検討すべきかもしれない。
- (3) 増加の者しい虚血性心疾患の早期発見は成人病対策上極めて重要であるが、現状の体制ではかなり不満足と云わざるを得ない。さしあたっては、有症状者や高血圧、高脂血症などのリスクファクターを有する者に対する負荷心電図などを、積極的に考慮すべきと思われる。

- (4) 男性のアルコール常用者における肝障害が相変わらず目立つ。今後の対策が急がれるところである。
- (5) 今回から胆のうを目標にして超音波検診を実施した。癌は発見されなかったが、予想以上に数多く結石、ポリープが発見された。腹部超音波検診は、増加の者しい肝、胆、膵、腎の癌の拾い上げ診断法として極めて優れており、今後検診の場で広く普及されていくと思われる。当センターにおいても技術的、時間的問題が解決されれば、胆のう以外へも領域を拡げていくべきと思われる。
- (6) 女性の貧血が特に50才以下の若年者に目立っている。種々の要因が考えられるが、食事を中心とした生活指導が必要であると思われる。
- (7) 血糖値の上昇がみられた者が、特に男性において前年度よりかなり多かった。これは肥満者の増加との関連において糖尿病予備軍として、今後注意すべき点である。
- (8) 脂質では高コレステロール血症の減少がみられたことは喜ばしい。前年度は男性において減少が目立ったが、今回は女性で特に減少が著しかった。しかし相変わらず50才以降の女性の高コレステロール血症が目立つので、なお一層指導が必要と思われる。
- (9) 肥満は、前回より特に男性において増加が目立った。これは結局、糖尿病、高血圧、心臓病などにつながるリスクファ

クターであり、重要な課題である。

- (10) 二次検診の状況をまとめると、要二次検診者は男1085人、1485件、女1147人、1511件、合計2232人、2996件で、そのうち受検したのは男686人(63.2%)、896件(60.3%)、女890人(77.6%)、1121件(74.2%)、合計1576人(70.6%)、2017件(67.3%)となり、前年度よりやや減少した。その結果、異常なし28.4%、経過観察52.7%、要治療17.2%、その他1.3%であった。

文 献

- 1) 前田 淳他：成人病検診における腹部超音波検査法の有用性について、日消集検誌、84：26、1989。
- 2) 岡村毅与志他：超音波による腹部の集団検診、日消集検誌、80：17、1988。
- 3) 小川忠那他：昭和62年度日帰り人間ドックの成績、富農医誌、20：5、1989。
- 4) 肺癌細胞診判定基準改訂委員会報告、肺癌、23：653、1983。
- 5) 仲間秀典他：大腸癌スクリーニング法としての各種免疫学的便潜血検査の比較検討、日消集検誌、80：48、1988。
- 6) 高木国夫他：膵癌診断の現況、胃と腸、15：595、1980。
- 7) 功刀正吏他：人間ドックにおける上腹部超音波検査、日消集検誌、84：106、1989。
- 8) 福嶋啓裕他：地域集検における超音波検診の位置づけ、日消集検誌、84：61、1989。